令和５年度　高校生の税に関する作文　入賞者

国税庁が募集する「税に関する高校生の作文」には、敦賀税務署管内の高校生から880点の作品が寄せられました。
ご応募ありがとうございました。

○金沢国税局長賞「あたりまえの風景」　浜上 恭羽（学校法人嶺南学園 敦賀気比高等学校１年）
○敦賀税務署長賞「私たちを守る税金」　宮本 葉月（学校法人嶺南学園 敦賀気比高等学校２年）
「世界の幸せを守るもの」　千田 実幸（学校法人嶺南学園 敦賀気比高等学校２年）
「当たりまえではない暮らし」　田村 紗千（福井県立敦賀高等学校１年）
「クラウドファンディング型ふるさと納税」　柴田 純奈（福井県立敦賀高等学校２年）

あたりまえの風景

敦賀気比高等学校 １年　浜上　恭羽

この春から高校生になった私。義務教育を終えて思うことは、「自由」よりも「責任」の大きさだった。あと数年で、「成人」として見られるようになり、何でもすべて自分の責任のもとで判断しなければならなくなる。正直、不安しかない。それはきっと、これまで自分がいろいろな意味で守られてきたからだと思う。

中学までは徒歩通学だった自分にとって、自転車通学となったこの春からは、周りの景色もガラリと変わった。前を向き、風を切って進む通学路、最初は大変でしかなかったその道をいつしか「これは助かる」と思って、客観的に見ている自分に気付いた。例えば、「カーブミラー」、学校到着までに何カ所かあるのだが、歩いていたときは、ほとんど気にすることはなかった。しかし軽車両として扱われる自転車に乗ってからは、曲がり角で必ず見るようになった。自分の安全はもちろんだが、周りの人の安全を守る意味でも大切な役割を果たしてくれているからだ。「自転車専用道路」もその一つである。車の往来が激しいところだからこそ、この道のありがたさを感じることとなった。

もちろん、これらが「税金」からつくられていることは知っていた。しかし、どれぐらいの費用が使われ、いくつ作られているのかといった細かな情報は全く知らなかった。私は、高校生になって初めて国税庁の「税の学習コーナー」というサイトを開いた。まず驚いたのは、公立学校の児童生徒一人当たりの年間教育費の負担額だった。高校生の私たちで一〇六万三千円が支出され、１８才までに合計で一千二百四十万五千円もの税金が私たち一人一人を援助してくれていると知った。この金額は、私が予想していた以上に大きな金額だった。さらに調べていくと、カーブミラーは単体でも六・七万円し、ダブルで設置されているものは、ミラーだけで十六万円もすることを知った。なお、自転車専用道路の更新（建設）費用だけで年間十一万七千円程もかかっていることを知り、その金額の大きさに言葉を失くした。

私がこれまで「あたりまえ」だと思っていた周りのものは、決して「あたりまえ」ではないことにようやく気づくことができた。おそらくこれまで自分の目に映っていた景色はごく限られた世界だったからだと思う。高校生となった今、自分もこの社会の一員であること、そして今後、この日本という国を支えていく一人であるということを認識するようになり、改めて「未来の日本」に思いをはせるとき、その姿が今以上により豊かで安心して暮らせる場所であってほしいと願うようになった。

この春から始まった新しい生活が、私自身の意識を変えてくれた。これからは、私自身が、自分の行動に責任を持ち、周りにあるものに対して「感謝」の気持ちを忘れない「成人」となっていきたい。

私たちを守る税金

敦賀気比高等学校 ２年　宮本　葉月

私たちが住む日本では近年、多様な災害に襲われています。

記憶に新しいことと言えば、今年七月の九州北部豪雨です。この豪雨によって被害を受けた方がたくさんおられます。床下・床上浸水の家屋被害、土砂崩れで多くの道路が通行できない事態になり、土石流の被害を受けた市町があります。このような時に、災害ボランティアが被災地を尾訪れ、土砂を撤去する姿をニュースなどでよく目にしますが、それと同じく消防、警察、自衛隊の方々が活躍する姿が映しだされます。私はこのようなニュースや新聞を見たり読んだりすると、頭が下がり感謝の思いでいっぱいになります。

自衛隊は、天災地変その他災害に対して人命または財産の保護のため必要があると認められた場合、都道府県の知事の要請に基づき、防衛大臣またはその指定する者の命令により派遣され、捜索、救助、水防、医療、防疫、給水、人員や物資の輸送など、様々な災害派遣活動を行っています。避難所の開設、支援物資なども全て税金によるものです。

この九州北部豪雨の時、私が住む市もスコールのような雨に見舞われました。

この日、私は学校の迎えを祖父に頼んでいました。普段なら二十分程度で着く道を祖父が片道二時間かけて来てくれたことを車の中で知りました。国道で一部土砂崩れがあり、高速道路が閉鎖されたことも重なり、たくさんの車が国道へ下りてきたことで大渋滞となったそうです。私は、また片道二時間かけて帰る祖父に申し訳なく思いました。朝学校へ送ってもらう車中で、母に「バスで帰ったら」と言われていた言葉を思い出し胸が締め付けられました。

その次の日も早朝から豪雨でした。私は祖父に迎えをお願いすることをやめました。母の昼休みの時間まで学校で迎えを待ち、家まで送ってもらいました。その時、祖父の住む地区は、避難所が開設され、避難所に支援物資が運ばれたことを知りました。昨日無事に家にたどり着いたと知りほっとしたのも束の間、祖父母のことが急に心配になりました。雨も次第に収まり、渋滞していた国道もたくさんの方々のおかげで復旧し通れるようになり、避難所も解除されたと聞きました。

災害から身を守るため、被害を未然に防ぐため、また災害が起きてしまった時の復旧作業のために多くの税金が使われます。

日本国憲法第三十条に、税金を納めることは国民の義務と定められています。この「納税の義務」を正しく理解し、人々が助け合い支え合えるような人になりたいと思います。

皆さんが納税している税金は、誰かのために役に立っている、そして自分もその税金に助けてもらっているということだと改めて気づかされました。一粒の雨が集まり豪雨になるように、一人一人の納税が大きな納税となり、たくさんの人を助けるのです。

世界の幸せを守るもの

敦賀気比高等学校 ２年　千田　実幸

四年前の消費税引き上げで文句を言う人が多くいた。それはもちろん、人々の支出が増えるからだ。だが、税というものは、本当に人を不幸にするのか。

そこで私は、消費税が安い国の国民はそれが高い国の国民より幸せなのかもしれないと思い、税金の量と幸福度の関係を調べてみた。だが、予想外の結果がそこにはあった。幸福度ランキングで上位のほとんどを占めるヨーロッパの国々は、税金は二十％を超え、高税金ランキングでも上位を占めていたのだ。ということは、税金は人を不幸にするのではなく、幸せにしているのだ。今までは税金は無駄な出費でしかないと思っていたが、それは全く違った。例えば毎日私たちの安全を守ってくれている警察や消防、健康を守ってくれる医療施設、生活で出るゴミを処理してくれるサービス。これらがなければ、安全で平和な日本はないし、未来もないだろう。そしてそれらは全て、私たち国民が払う税金によって賄われているのだ。このことから、税金による出費以上に、返ってくる幸せが大きいと私は思った。これからは、私たちに幸せを返してくれる人達に感謝しながら税金を払いたいと思う。

また、私は世界中の飢餓に悩む人を助けたいとずっと思っているが、まず言葉が通じないので、すぐには解決できない難しい問題だと痛感している。でも、そういった飢餓に悩む人にも私たちの税金が使われていると知った。私一人では解決できないことも、皆の税金が集まれば解決できると気づいた。また、私もその中の一人であり、私の払う税金によって少しでも世界の人が助かっている、私と世界は繋がっていると感じることができ、とても嬉しく思う。

税金というのは、払えばその何倍、何千倍もの幸せや平和が返ってくる。そして税金は国境をも超える。税金を払って幸せになるのは、私たちだけではなく、世界中の悩める人々もまた同じなのだ。税は、無駄な出費などではなく、世界中の人々を幸せを守る大事なものなのである。

当たりまえではない暮らし

敦賀高等学校 １年　田村　紗千

私たちは日頃、間接的に税金に触れているが税金について考えることはなく、私にとって謎だらけの税金を調べるきっかけとなったのが「JK、インドで常識ぶっ壊される」という本だった。この本は日本の快適な暮らしに慣れ切った私と同世代の女の子がインド滞在記について綴った本で私にとって大きな影響を与えた本の一つだ。

インドは日本と比べて生活インフラが整備されておらず、大きな社会的格差が存在していることを知った。例えば、インドの道路は平になっておらず、車と車の間の距離がとても近く、車、バイク、３輪のオートソキシャが走る中、牛や犬、鶏などの動物が自由に歩き回っている。しかし日本は税金によって高度なインフラ整備を行っているため、道はもちろん平らで、高い水準の交通安全性が確保されている。他にもインドは人口が多いためスラムなど貧困地域に住む貧困層が、多く存在する。よって、ストリートチルドレンやスラムで暮らす子どもたちは、家庭の事情で学校に行けなかったり、適切な医療を受けれてない。だが日本は、小中学校の就学率がほぼ一〇〇パーセントなため、ほとんどの子供が学校に通っている。医療に関しても治療費がとても安く、具合が悪くなったら病院に行って薬をもらえる環境である。これもすべて税金のおかげなのだ。

このように、日本と比べてインドは難題がたくさんある。この難題に対して日本は、お金を貸してあげるだけでなく、ダムや道路、病院をつくったり、病院で使う薬や注射器などを送ったりしている。これも実は税金によって賄われている。税金を払うことは私にとって当たり前かもしれないが、インド難民や世界の困っている人を助ける行動の一つなのだと気づかされた。

税金は国民の負担になるから必要ないと思っている人たちには、税金によってどれだけ助けられているのかということをよく考えてほしい。そして税金が世界中の困っている人を助けているということも考えてほしい。国民一人一人が、税金の使われ方や必要さを理解して、税を負担したり納めたりすることで、現在の私たちの生活が支えられ、支え合うことができるのだと思う。

クラウドファンディング型ふるさと納税

敦賀高等学校 ２年　柴田　純奈

私は、高校生ではめずらしいかもしれないが、クラウドファンディング型ふるさと納税で支援をしていただく立場となった。私が所属する団体「特定非営利活動法人とても敦賀すきすき」は八月十四日からクラウドファンディング型ふるさと納税に挑戦することを決めた。

「とても敦賀すきすき」は水前寺清子の敦賀とてもすきすきなど、福井県敦賀市で昔から受け継がれてきている民謡踊り講習会を開催している。ありがたいことに、昨年に比べてだんだんと依頼を受けることが多くなってきてこれまでよりもっとたくさんの人に知ってもらいたい、もっと活動を広げたいと思いクラウドファンディング型ふるさと納税に挑戦することになった。

福井県のクラウドファンディング型ふるさと納税のメリットは寄付者の実質負担が二千円と少ない点だ。また、私たちがイベントに参加した際はいつも、多くの方々が応援の声をかけてくださり、強い励みになっている。周りの方々の支援は、私たちにもっと頑張ろうと前向きに思わせてくれる。これこそが、クラウドファンディング型ふるさと納税の意義であると私は考える。

私たちがクラウドファンディング型ふるさと納税で支援していただいた暁には、色々な場所で民謡踊りを通して感謝の気持ちを伝え、活動の範囲を広げ、精通したい。敦賀市内、福井県内に留まらず、知名度を上げて支援者の期待に応えたいと考えている。このプロジェクトは、受け取る側で支援してくださる方のためにもっと頑張ろうと思える、お互いにとって地域活性化のために前に進んでいくものである。

クラウドファンディング型ふるさと納税は福井県が全国初の取り組みである。全国各地でもこの事業は広まってきているが、まだまだ知名度が低い点が課題であると考える。私たちの団体により多くの人に知ってもらうために、駅にチラシを置いたり、敦賀市内の各地区の回覧板にチラシを挟んでもらったりしてたくさんの人の目に留まるようにしている。このプロジェクトの知名度を上げるために、まずは私たちのプロジェクトを成功させたい。そして、全国各地の地域活性化を願っている。

私は、高校生でこのような経験ができているということは本当に貴重で誇らしいことだと思う。絶対にクラウドファンディングを成功させて、民謡の再興、敦賀市の活性化に確実に繋げていきたい。